

學寮俳句會報 : 俳句 : 文苑

著者	千艸, 子明, 北川, ?蓼, 桔槔, 京杜, ?奴
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 2 1
ページ	6 7 - 6 9
発行年	1907-06-17
その他の言語のタイトル	学寮俳句会報 : 俳句 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/6047

まんまるの月が出でけり木の芽町 全
 鉢植の大根花咲く都かな 全
 鯛繩に蝶螺かぶりぬ春の海 全
 實五石大瓠の種を蒔きにけり 全
 繁縷や孟宗藪に藁の散る 岸 三
 合歡の芽の泉に青く夏近し 全
 倉の戸に蔦の花咲き夏近し 全
 玫瑰や箱舟伏せし川の砂 全
 貝殻に海苔搔く岩の平かな 瓢 郎
 高潮の瀬鼻にくろき若布哉 全
 虚ろなる杉に火の入る野焼哉 全
 咲き過ぎの五形花深し蛙鳴く 全
 肥に打てば苗代に飛ぶ蛙かな 全
 田の岩に小さき花咲き蝶の來る 全
 薄様に落雁白き二月哉 紅 鱗
 冴ね返る咳嗽の薬や飴大根 全
 雪解の木灌溪へ續きけり 全
 氷解けて鹽取る山に登りけり 全

魚の餌に田螺つぶせば田螺の子 全
 鳥の巢や林の中に積む杉葉 全

學寮俳句會報

大皿に氷運ぶやあを簾千 艸
 山漸く月吐かむとす沖膾 全
 蚊柱や行水捨てる茗茄畑 全
 手洗ひつ二の船見るや沖膾 子 明
 夏の月岬の茶屋に風激し 全
 落し物燭して見るや門の臺 全
 透き見わて醬油しみ鳧心太 全
 血を吐いて一間悲しむ牡丹哉 全
 背合せ机するける夏書の間 紅 鱗
 老鶯や竹の樞の開 放し 全
 葛水や山蟻浮きて草に捨つ 全
 ふすくと灰に焼ける十薬哉 全
 白檠わやはきながら下駄を洗ふ川 全
 草合堂上堂下風渡る 瓢 郎
 餉の拆や夏行の廊を打ちまわる 全
 苔青き椋の根曲り山清水 全

鶉の篝川狩の灯と下り鶉 全
 供船に簀を渡く鶉沖膾 全
 山百合や夏行の椽に雨近く 岸 三
 泉石の茂み一樹の青梅かあ 全
 草山や川の洲白く夏の月 全
 空槽の口取れば蚊の唸り哉 全
 青梅の枝を梯子に叩き鶉 渭 南
 鮮食うて會心の詩を講じけり 全
 夏の月河原の草を踏みに行く 全
 園中の清水に名あり蒼梧庵 全
 傾きく石碑の基や羽蟻飛ぶ 北 川
 沈みたる小蚯蚓白き清水哉 全
 大いある人の足跡清水かあ 青 蓼
 雨晴れて牡丹閑かに散る日哉 桔 槔
 目覺むれば新樹目近し鮮の宿 李 王
 實櫻や鐘小よき山の寺 全
 沖膾島の八景四觀の中 全
 閑園や枝蛙鳴く樹々の雨 全

紫竹茂る偏額低く老鶯居 全
 魯桑の葉みづくしくて青蛙 戰 車
 日傘さすや焼けつく如き舟の板 全
 水浴の冷わきりし身や沖鱒 全
 鍬の刃にのせて捨てけり墓 全
 老鶯や藪くゞりする八幡道 全
 提灯を釣手にかけてし蚊帳かあ 京 杜
 雨につる蚊帳に和靈の祭りかな 全
 蚊帳近く雨に刈麥取り入れし 全
 黄塵に幟の限りはためきぬ 巨 足
 舟寄せて舟に賣る梨買ひに鶉 全
 眞黒に蟻の蠢く暑哉 全

四月廿日紫濱吟社例會(七寶堂運座一回作者八人選者八人。瓢
 郎二十四点李王三十一點紅鱒十八点于明戰車十二点以下畧入
 選の句。

竿立てく晴るくを待ちし幟かな 瓢 郎
 倉あけて俵にながし蛇の衣 全
 多賀の社甲月寄進の柄杓かな 李 王

雨の日を庵に四月の茶の湯かな

全

下駄の石木の根に叩く閑古鳥

紅 鱒

引きわたるし頭に鯉がかり覺

全

名所繪に江戸一面の幟かな

子 明

若楓床几を去つて湖を見る

全

閑古鳥小僧の足駄音高く

戦 車

六月二日紫溟吟社例會（箕踞洞）作者九人内青奴歸り他に李王
來りて選者亦九人瓢郎十六点紅鱒十五点戰車十四点青奴十三
点渭南十一點番外巨足同点以下畧す入選の句

堰氷に背を打たする夜振哉

瓢 郎

畚投げて深みを渡る夜振哉

全

日焼田や慈姑花咲き雲の峯

紅 鱒

簾打つ風あり氷削る音

全

豊虫に秋の近しや氷店

戦 車

健在に古き鯉や井戸浚

全

白にくる松伐る日なり雲の峰

青 奴

朝早く寺門掃きたり夏柳

全

井戸浚終へて榎に月上る

渭 南

酒井や松許りなる寺の庭

巨 足

樽いと高く井戸替の綱長し

緑 耳

震 渭 門 外 青 山

山 近

露 重 窓 前 綠

竹 低 (管三品)